

老兵死なず——31年目の聖学院大学

聖学院大学・聖学院大学総合研究所は、本年度をもって創設から30年という一つの節目を終えた。

30年前、数年の内にベルリンの壁が落ち、ソ連邦が崩壊するとは、だれが予想し得ただろうか。20世紀に誕生し、地球上の40%の国家が採っていたこの社会主義体制は、世紀末を待たずして崩壊していったのだ。続く新世紀にもたらされた衝撃は、さらにわれわれの所与の知見と予想を、そして既存の学問の指摘を大きく超え出たものであった。ミサイルと化した二機の旅客機による貿易センタービルへの急襲、そしてリーマン・ショック、さらに3.11フクシマ、それらすべてが、「想定外」の出来事であった。21世紀への転換を、19世紀末ウィーンの芸術と学問になぞらえて固唾を飲んで待っていた筆者にとって、それらはまさに別な意味でも衝撃的な出来事だった。

一方、当時の知的な状況は、真理の相対性の指摘、価値の多元性の承認、根拠の隘路を執拗に暴き続けたポストモダンの議論に疲弊し、返す刀で、地球環境、生命倫理など、相対化しえない「人類共通の難問」を声高に掲げ始めていた。そこに先に挙げた「想定外」の事件が付け加わる。この社会の変貌を目の当たりにし、またそれに対処すべく、これまでのメタ価値論的・抽象的な議論に替えて、めざすべき核を明示しないしは暗示する議論、あるいはプラグマティックな効用に定位する議論が、幅を利かせるようになった。学問的真理の仮設性の主張、政治的性格に対する警鐘は、エコロジー、人間の尊厳を掲げる議論のまゝに打ち消され、現実の効用、実際の利得から学問の価値が語られるようになった。かつて20世紀初頭に学問の世界を震撼させた、「諸科学の危機」、「厳密な学」といったスローガンは何処吹く風で、歴史解釈の恣意性や特定の民族の価値を称揚する危険性のなかで唱道された「客観性」の要請さえも、「最大多数の最大幸福」の獲得を目論む営為のまゝに、蹴散らされた。

われわれの知は、このような文脈コンテキストのなかで、「役に立つか／立たないか」の二分法で判断されるようになった。この二分法の下、知はフラグメント化される。もはや「体系的な学」などというものは過去の遺物。哲学は個別科学と化し、社会学は現状の分析と評価のツールとなった。この時代において求められるのは、個々のテーマに即したアドホックな対応を可能にする知である。この流れは、大学のカリキュラムにも、さらには大学の存在そのものにも及ぶ。役に立つ知識、役に立つ思考、役に立つ……、大学で議論される多くのトピックスが、この「役に立つ／役に立たない」の二分法から審問にかけられる。結果、人文科学・精神科学は放逐され、社会科学は政治化され、技術と効用アフォーラットに結び付く学問、さらにはキャリアサブジェクトに結び付くものこそが称揚される。こうしたトレンドは、時代の要請への対応として常態となり、いまや大学は、この趨勢の維持・再生産のプロセスに入り込んでいる。

そもそも大学は、こうしたプロセスエージェンシーの主体ではない。こうしたプロセスを客体として対象化する主体である。すなわち学問は、与えられた問いに対し解答を用意するだけではなく、問いそのものを、その背景と根本から問い直す。「その問い」が生ずる、そのこと自体を問いに付すのである。先の例でいえば、「想定外／想定済み」という判断アフォーラットそれ自体の想定能力について、「役に立つ／立たない」という基準そのものの有用性について斬り込む、超営為である。

この営為なくして、学問はあらゆる有用性や技術のまゝに、その存在意義を失う。聖学院に限らず、日本の大学が、なおもってこの営為を嚮導する思惟に与していくかどうか、若き学生や社会にそうした思惟の種を発信し、植え付けることができるかどうか。

そろそろ今世紀を特徴づける世界の形が垣間見えてこよう。聖学院が何を表す「大学」となるのか、そのなかで己は「消えゆくのみ」か、あるいは「いまだ死なず」か。創設時から在職する最後の老兵は、いまそれを固唾を飲んで見守っている。